M.ブローグ

新版

経済理論の歴史 I

古典学派の展開

久保芳和／真実一男 訳

ECONOMIC THEORY IN RETROSPECT

Mark Blaug

東洋経済新報社

M. ブローグ

新版 経済理論の歴史

I

古典学派の展開

久保芳和
真実一男 訳

東洋経済新報社

訳者紹介

久保芳和（くぼよしかず）　関西学院大学教授
真実一男（まざねかずお）　大阪市立大学教授

新版 経済理論の歴史(I)（全4巻）　定価 3900 円

昭和57年10月4日 発行

訳者　久保芳和／真実一男
発行者　佐野佳雄
発行所　東京都中央区日本橋本石町1の4　東洋経済新報社
郵便番号 103　電話03(270)4111(大代表)　振替口座東京3-6518

〈検印省略〉落丁・乱丁本はお取替えいたします.　3033-3265-5214
Printed in Japan

わが子、デイヴィッド・リカードへ

「死せる作者たちは、われわれから遠い。というのはかれらが知っていたよりもずっと多くのことを、われわれが知っているのだから。」とだれやらがいった。たしかにそうなのだが、かれらはまた、われわれが知る水準に左右されるのだ。

T・S・エリオット

思索的で論争的な科学を会得するのには、権威をある程度複数化することが望ましいという意見を、われわれは奉じる。教師が一人のお気に入りの著者の語句や比喩そのものを教えこもうとし、生徒がそれを棒暗記しようとする誤った傾向は、いにしえのローマ人がなしたように、「奴隷に突進する」人々の忠誠を分つことによってのみ矯正されうる。したがって理論の歴史は、哲学の場合と同様に、経済学の場合とくに教訓的である。歴史と文学、弁証法、およびギリシャ人が包括的に「ことば」とよんだすべての学問は、単一の学派ないしは体系に局限されてきた人々によってむすばれることがたしかである狭い偏見や偽りの連想を、もっともよく矯正するように思われる。

F・Y・エッジワース

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

訳者序文

著者マーク・ブローグ氏は、一九二七年オランダに生まれたが、第二次大戦勃発とともに、一九四〇年イギリスへ、四二年にはさらにアメリカへ避難して、後にニューヨークのコロンビア大学で経済学修士（五二年）、博士（五五年）号を取得した経済学者である。その職歴は、合衆国労働省の統計係官に初まり、一九五四―六二年イェール大学経済学助教授、六〇―六一年マンチェスタ大学経済思想史客員教授、六五―六六年シカゴ大学教育経済学客員教授を経て、ロンドン大学教育研究所教育経済学教授、ならびにLSE非常勤講師に及ぶ。また、UNESCO、OECD、世銀、ILO、フォード財団等の顧問、アジア、アフリカの開発途上諸国への国際使節団への参加の経験もあり、一九六七年にはインドで、六九年にはタイで暮らしたことがある。したがって、その研究分野はいたって広く、経済学史、現代経済理論、経済学方法論、教育経済学にわたって、実に多数の学術論文、および、本書を含むたとえば以下の著書がすでに刊行されている。

Ricardian Economics: A Historical Study, 1958, Yale University Press（馬渡尚憲・島博保訳『リカァドウ派の経済学』一九八一、木鐸社）; *An Introduction to the Economics of Education*, 1970, London, Penguin Books; *The Cambridge Revolution: Success or Failure? A Critical Analysis of Cambridge Theories of Value and Distribution*, 1974, London, The Institute of Economic Affairs（福岡正夫・松浦保訳『ケンブリッジ革命』一九七七、東洋経済新報社）; *A Methodological Appraisal of Marxian Economics*, 1980, Amsterdam,

North-Holland; *The Methodology of Economics, or How Economists Explains*, 1980, Cambridge University Press.

本書の初版（pp. xvi＋634）は、著者の在米時代の末期一九六一年に完成したが、著者はロンドン移住後二度も、徹底的な補訂・改良を試みている――第二版六八年完成、pp. xix＋710. 第三版七六年完成、pp. xxiv＋756. これらの重版により、独自な経済学史を樹立しようとする著者の意図と力量が、ますます鮮明かつ十分に実現しつつあることは、いうまでもない。このような著述の展開の背後には、読者の批判や誤解への著者の応答、著者自身の研究の進展といった、いかなる書物にも共通な宿命的事情はもちろん、第三版序文も明らかにするような、七〇年代初頭以降の、経済学の危機意識の滲透、経済学史研究のルネッサンスといった、特殊歴史的事情が厳存する。〈経済学史〉研究の復活が、〈経済学〉の危機克服にどのように寄与しうるかに、今日の世界のあらゆる経済学者の誠実な関心が――多少の差はあれ――集まっている、といってもよいだろう。そう考えるとき、われわれは、本書における膨大な研究文献の集積――おのずから欧米における経済学史研究史の鳥瞰図となっている――と、今後なお予想される著者の多方面な研究活動から、大きな刺激と挑戦を受けとるにちがいない。イギリスの経済学史学会、History of Economic Thought Conference で精力的に活躍する著者の姿を想像しながら、〈危機〉の時代にわれわれはふたたび本書の邦訳を送りだそうとしている。

一九八二年七月

訳者を代表して

宮崎犀一

凡　例

一　これは、M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, Third edition, Cambridge University Press, 1978 の全訳であるが、Ⅰ巻（第一章―第五章）、Ⅱ巻（第六章―第八章）、Ⅲ巻（第九章―第一一章）、Ⅵ巻（第一二章―第一六章）と四冊に分かれたのは、もっぱら出版上の都合による。

二　Ⅰ巻の訳者は、久保・真実の二人であるが、その分担はつぎのとおりである。

序文および序章（真実）
第一章―第三章（久保）
第四章―第五章（真実）

三　「本文」はできるだけ読みやすくという趣旨から原語をいっさいいれなかったが、どうしても必要と思われる場合には、ルビをもってこれにかえた。

四　「文献案内」は逆にできるだけ原語表示によったが、そのさい洋雑誌については、別掲「文献略語表」による表示法を採用した。

五　「文献案内」中、著者がそれに言及しているがその文献名を明示していないもの等については、訳注によって補った。しかし、刊行年以後にリプリントされたもの等については、当該文献のすぐあとに〔　〕をいれて補った。

六　「本文」および「文献案内」の両者を通じて、掲載文献中邦訳のあるものについては、そのうちの適当なものを必要に応じて当該文献のすぐあとに〔　〕をいれて補った。

七　「本文」および「文献案内」のいずれにおいても、著者の考え違いや著者による引用違い等は、訳注で処理した。ただし明らかなミスプリントは、無断で訂正しておいた。

八　以上の訳注は＊をつけ、これに対して原注は章別の通し番号をつけ、いずれもパラグラフの終りに挿入した。

九　なお「本文」中の“　”は「　」とし、イタリックは書名にかぎり『　』に、その他強意の場合にはゴチック体とした。

序文（第一版）

本書は、正統派経済理論として知られてきたものについての、論理的一貫性と説明的価値を研究するものである。このうけいれられた学説群の歴史は、少なくともアダム・スミスにまでさかのぼる。しかしながら、わたくしは、それ自身の目的のために、歴史的先行者に関与するのではない。わたくしの目的は、現代経済理論を教えることにある。しかし現代の理論は、現在ではすでに解かれている昨日の問題すなわち現在ではすでに矯正されている昨日の誤りの傷痕をおびているので、過去から継承された遺産としてでなければ十分に理解されえない。わたくしが歴史的な叙述を採用したのは、この理由にほかならない。しかしそれにもかかわらずその焦点は、歴史的な横道とか伝記的な色上げを含むことによって水割りされない、理論的分析におかれる。

研究者はしばしば、経済学史研究から導出されるインスピレーションについてかたられる。しかし、かれらは、経済思想史家が現代経済理論の研究から導出するインスピレーションについては、それほどしばしば想起させられはしない。本当のところ、人はアダム・スミスを知ることなしに、近代価格理論を研究すべきでないのと同様に、近代価格理論を学びおえることなしに、アダム・スミスを読むべきではない。過去と現在の経済的思考のあいだには、相互作用がある。なぜならば、われわれがそれを多くのことばで書きしるすかそうでないかにかかわらず、経済思想史は世代ごとに書きかえられつつあるのだから。

経済学史の研究は、それが研究者をはげましてどの程度までその主題についての偉大な著作中のあるものに孫びき

でなく親しませるかということから、その存在理由を導出するに違いない。わたくしが、スミス、リカード、ミル、マルクス、マーシャル、ウィックステード、およびヴィクゼルの著作に読書案内をいれたのは、この理由にほかならない。経済学というような主題において原典を読むことの重要さは、いくら強調されてもされすぎることはない。われわれはすべて、つぎのような経験があるに違いない。すなわち、ある偉大な著書に対する注解を読んだのちその本文自身にたちかえると、われわれが予期していたよりもいかに多くのものがそこに存在するかを見いだすという経験をである。注解はきちんと一貫しており、偉大な著書はそうではない。そしてこれこそが、なぜ偉大な書物が読むに値するかという理由にほかならない。

わたくしは、草稿の一部を読んで多くの役に立つ示唆を与えてくれた、H. Barkai, B. Balassa, W. Fellner, T. W. Hutchison, R. L. Meek, G. Shepherd の諸氏に感謝の意をあらわしたい。わたくしはまた、述べるのにはあまりに多すぎるわたくしの大学院の学生たちにも感謝したい。というのは、かれらはおりにふれて、わたくしが愛好するお得意の問題中のあるものをわたくしと論争しつくしてくれたのだから。さらにまたわたくしは、スタイルの改良に対して Miss Margaret Lord に、草稿の有能なタイプ化に対して Mrs. A.Granger に、それぞれ感謝しなければならない。

わたくしは、出版された著作から引用する許可を与えられたことに対して、つぎのような出版社のおかげをうけている。すなわち、Harper and Brothers——J. Viner, *Studies in the Theory of International Trade*, copyright 1937; University of Chicago Press——*Adam Smith, 1776—1926*, ed. J. M. Clark, and others, copyright 1928 by the University of Chicago, and G. J. Stigler, "The Development of Utility Theory, II," *Journal of Political Economy*, October, 1950; Harcourt, Brace and World——J. M. Keynes, *The Economic Consequences of the Peace*, copyright 1919; Review of Economic Studies——O. Lange, "Marxian Econ-

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

omics and Modern Economic Theory," *Review of Economic Studies*, June, 1935 ; The Macmillan Company——A. Marshall, *The Principles of Economics*, copyright 1930, and K. Wicksell, *Lectures in Political Economy*, copyright 1934; and Routledge and Kegan Paul——P. Wicksteed, *The Common Sense of Political Economy*, copyright 1934 ゴ示ネルコトヲアラハス。

ミヰー・ベイカン、ヨキテイカンノヒと

一九六一年一一月

M・ブローグ

序　文（第二版）

わたくしが本書でなそうと試みてきたことは、ひじょうにしばしば誤解されてきたので、わたくしは自分の目的を再説したい。所定の時期の経済理論はその当時ゆきわたっている歴史的・政治的状態の反映にしかすぎない、という超マルクス的主題を提出されるとき、わたくしは、正反対の主題――経済理論のための経済理論――も、同様に誤っているのではないかと疑ってきた。人が非理論的な出来事になんらの言及をも含まないような経済学史を読むようなことがあると、想定してみよう。その場合それは、典型的もしくは準マルクス的提示よりも啓蒙的ではないということにならないのだろうか。もちろんそれは限られており不十分なものであろうが、しかしそのことは知性史の一元的原因解釈論についてみれば、すべて真実なのである。われわれが経済学と考えるものの多くが主要な未解決の政策問題に対する知的反応にその起源をもったということは、完全に明らかである。アダム・スミスと重商主義的制限、デイヴィド・リカードとイギリスの食料供給を国内資源からまかなう困難、ケインズと一九三〇年代の大量失業の取扱いは、お気にいりの例示である。しかし同様に明らかなことだが、経済思想史の大きなカタマリが論理の誤謬や分析のギャップをめぐるものであり、同時代の出来事になんらの関係をもたないことも、主張されなければならない。そしてそれゆえに、これが全部の話もしくはその話の最良の部分だというのではなくして、ただマレにしか語られない一部にしかすぎないということを弁解の口実とすることによって、わたくしは、経済学者が他の科学者のすべてと共有する願望、すなわち洗練し改良し完全にするという願望によって促進されながら、先行する分析から進化するもの

としてそれを描くような経済分析の歴史を書こうと試みてきた。三〇〇年以上も前にフランシス・ベーコンがいったように、

「なぜならば、もしもそれが物質に働きかけるならば、神の創造物の企画である人間の知慧と精神は素材に従って働き、それによって制限される。しかしもしクモがかれの網を作るように人間の知慧と精神がそれ自身に働きかけるならば、その場合にはそれには終りがなく、まさに学問の網を生みだす。ただしその網は、糸と仕事の美しさでは賞讃すべきものであるが、しかしなんらの実体もしくは利益ももたらさないものである。」（『学問の進歩』ロンドン、一八六五年、三二ページ）

本書はすべてこれらの「学問の網」をめぐるものであるが、しかしわれわれはたえず、「いかなる実体もしくは利益をもたらさないのか」と問い続けるだろう。

第一版と同様に、われわれは一八世紀の重商主義的著者から始め、中世のスコラ学者あるいはプラトンやアリストテレスからは始めない。疑いもなくギリシャ人は経済思想史に貢献したが、しかしかれらの経済観念は他の先行的概念にひじょうに密接に関連させられていたので、ギリシャ哲学およびとくにギリシャ政治理論を全面的に取り扱わなければ、それらの経済観念に正当性を与えないものである。同様に高利についてのスコラ的分析はそれ自身において魅力的であるが、しかしスコラ的推理を誤解しないようにするために、中世的カソリック教義において必要とされる背景が、この種の書物で保証されているよりも、多大のスペースを吸収することになろう。独立の研究分野としての経済学は、一七世紀までには出現しなかった。おそらくその理由は、それ以前の世紀では経済的取引が国民的な基礎もしくは地方的な基礎にさえ統合されていなかったからであり、経済的制度が軍事的・政治的考慮によってきびしく拘束されていたからであり、経済的動機が社会的行為の制限的一局面以上には影響を与えないようにされていたから

なのであろう。なぜ一七世紀以前のすべての経済的推理が仮のものであり、非体系的であり、また経済活動の自立的分野の認識を欠いていたのかは明らかではないが、しかしその実情がそうであったということは、ほとんどかつて論争されることがなかった。そして本書は、経済学者よりもむしろ経済学に関する書物なので、われわれは「主題の古生物学」として叙述されるかもしれないものを無視したい。

以前と同様に、説話は、われわれ自身の時代まで、ほぼ一九六〇年までに下降させられる。もっとも活動分析、経済動学、厚生経済学、成長モデル、技術変化――近年において経済学を支配してきた話題――については、第一版よりもこの版ではより多くの材料を含んではいるけれども。わたしのもっているカードをすべて机上におくために、公共部門の役割に関するかれらの見解を取り扱うアダム・スミスとJ・S・ミルについての諸章に新節が付加され、「単一税」の概念はいまや人口と地代に関する章でいくらか詳細に議論され、セー法則に関する章でのハロッド＝ドーマー成長モデルの取扱いは拡張され、独占的競争理論に関する新節が第二のマーシャルの章〔第一〇章〕に付加され、限界生産力理論に関する章はまったく改訂されいまや革新と相対的分け前に関する新節を含み、ワルラス、パレート、ケインズに関する諸章はひろく書きかえられ、本書の最終章「方法論的あとがき」は、科学的経済学の将来の見こみに関する議論へと拡張された。そして第一版のほとんどすべてのページは、なんらかの修正と、わたくしはそう思いたいのだが、改良とをうけた。それは、いまやよりよき書物となった。もっともそれが最初から良書であったかどうかについては、他人の判断をまつべきであろうが。

研究者が本書の著者をも含めて、すべての注解者を倍加させるのを奨励するために、この版は第一版と同じく、経済思想史上の七主要著作に対する詳細な読書案内を含む。それらの案内は原著者を参照する刺激としてよりも、むしろ天与の虎の巻として歓迎されると第一版の書評者が感じていたので、わたしは読者に再度つぎのように警告した

い。すなわち、案内は要約でも抜萃でもないのであり、それらは連続的注解であり、偉大な経済学者が実際にいったことよりもむしろ、おそらく意味したかもしれないことにより多く関与するものであると。要するにそれらは、明らかに問題を挑発するように企図されており、それでそれらを原典の代用品として利用する研究者は、古い壜をみたが、しかし決してその中身を賞味しなかった精選ブドウ酒の目キキ人に似ているのである。

わたくしは、この改訂に取り入れるようになった特別の示唆をしてくれたことに対して、K. Kubota, E. Kuska, R. M. Olsen に感謝したい。わたくしは全手稿をかの女らがたゆまずに結合してくれたことに対して、Miss R. Towse と Miss M. Woodhall に特別のおかげをうけている。かの女らが着手したときわれわれは友人だったし、そして驚くべきことに、われわれは現在もなお友人なのである。

一九六八年一月

イングランド、ロンドンにて

マーク・ブローグ

序文（第三版）

本書の第一版は、一九六二年に現われた。しかしその時までに経済思想史は、イギリスおよびアメリカの大学の教科目としては事実上姿を消してしまっていた。「経済思想史の価格はいくらか」と題され、その年に出版された知覚力ある論文においてドナルド・ウィンチは、たいていの経済学者がなにゆえにかれ自身の専攻分野の歴史についてほとんど知らない、またそれ以上にかまうことさえしないのかを説明した。すなわち、近代経済学の最近の発展によって、経済学者は、かれらがついに新問題に対する新回答を提供し始めつつあるか、もしくはともかくも古き問題に対してよりよき回答を提供し始めつつあるとますます感じるようになってきたし、このような確信的な精神状態は、当然に先行者や先駆者への興味をそぐ傾向にあるのだと。しかしながら一九六〇年代の自己満足（ペイティング）は、一九七〇年代の自己嫌悪（ネイル）へ道を譲った。今日ではひろくゆきわたって繰り返し表明される経済学の「危機」感がある。このことは部分的には、スタグフレーション、汚染、労働市場における性的、人種的差別のような顕著な現代の経済問題を捕え損なっていることを反映している。今日の主要な経済問題を捕え損なうというこの事実が、今度は急進派経済学、新マルクス派経済学および後期ケインズ派経済学といったそれに代わるべき経済学説を生みだしてきたのであり、それらのすべてはこれらの未解決の問題に光を投げることを意図しており、その過程でかれらはまず主流をなす近代経済学を批判し、それからそれを拒否するのである。ウィンチ主題になにかが存在するとしたら、近代経済学の状態についての当代の不安は経済思想史への興味の再生をもたらすであろうと、われわれが期待しうるかもしれないということで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com